新 恋愛今昔物語

佐々木丸美

恋愛今昔物語

佐々木丸美

新　恋愛今昔物語

著者紹介　昭和二四年北海道石狩郡当別町に生まれる。現住所／北海道石狩郡当別町西小川通五四。著書／「雪の断章」「忘れな草」「花嫁人形」「崖の館」「水に描かれた館」「夢館」「恋愛今昔物語」

一九八一年四月四日　第一刷発行　一九八一年八月一二日　第二刷発行

著者―佐々木丸美（ささき・まるみ）

発行者―三木　章

発行所―株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二　電話　東京〇三（九四五）一一一一―大代表　振替　東京八―三九三〇

印刷所―豊国印刷株式会社／千代田オフセット株式会社

製本所―株式会社黒岩大光堂

定価―八八〇円　落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

© MARUMI SASAKI 1981 Printed in Japan

0093-307581-2253（O）　（文2）

目次

夏緒の失敗　玉屋の椿より　7
秋緒の失敗　鼻たれ小僧さまより　39
冬緒の失敗　赤ん坊になったおばあさんより　73
春緒の失敗　こじきのくれたてぬぐいより　119
生徒　たのきゅうより　159
嗚呼、エリート　座敷わらしより　195

装画　味戸ケイコ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

新恋愛今昔物語

夏緒（なっお）の失敗

——玉屋の椿より

あるところに四人の女性がいた。四人とも少々、年をくっていた。

一人は結婚できないのをひがみ、一人は貧しさをひがみ、一人は若くないのをひがみ、一人は美しくないのをひがんでいた。四人は友だちだった。それぞれの悩みに女のエゴが捏(こ)ねあわされ、嫉妬の餡(あん)こでまるめられ、個性の衣で装飾(デコレーション)されていた。そこへ摩訶不思議なる奇跡が起きて、一人ずつ夢が叶えられていった。このとき女心の浅はかさが露出し、欲に溺れ、ついには失敗して泣くのだけれど——。

夏の盛りの青い空。白くゆるやかに感傷の雲が流れる。人の世の幸と不幸を映すコントラスト。私の生きざまはさてどちらだったのかと思うとき、雲は風に吹かれて彼方へ消えた。こんなものさ、私の人生は。今まで一度だって静かに考えて答えを見つけたことはない。出たとこ勝負でやってきた。裏切ったり裏切られたり。気性の荒らさにまかせてあらん限りの悪態をついて哀しみをまぎらわせてきた。泣いて耐えるおとなしい女なら別の生き方もあったかもしれないが。私の生き方を笑わば笑え。こうしなければ日々を越えられなかった切なさを誰にわかろうか。存在の主張をせめて、反省まじりの過去に透かし、この美しい夏の青空に久しく忘れていた女の感傷を浮かべて泣いてみたい。

夏緒の負けず嫌いは定評があった。特に友人三人への敵愾心(てきがいしん)を隠そうとしない。学生時代は成績で争い、卒業期は就職で争い、就職後は衣裳で争い、婚期には縁談で争い、多分一生涯を争いながら暮すだろう。そもそも葛藤の原因は四人とも、容姿も育ちも頭の程度もどんぐりの背くらべというところにある。他人を見ないで己の個性をみがけばこんなことにはならなかったろうに。

夏緒は結婚したかった。それが唯一の幸せと若い頃から信じてきた。夫をもてば半分は相手の人生にからめるのだから諦めて静かな日々を送れるにちがいない。今までこうしてあくせくイラ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

イラしてなおも満たされないのは何もかも自分ひとりで背負うから、それが一直線に友人たちへのライバル意識へ直結したのだ。まして三人はまだ縁づかない。自分がボンと嫁げば幸せの旗頭となれる。金か地位か、何かひとつぬきん出ている男性ならコブつきでもババつきでもいい。しかし見わたしても目ぼしいのはいない。たとえいたとしても出る幕はない。それほど独身女性が多い会社だった。それにしても短大から会社まで同じとは。「何が因果で」と悲痛な声をもらすほど四人はいつもワンセット。第一志望は揃って不採用、第二志望も無念の涙。なかばやけくそで四人一緒に願書を提出したら書類審査パス。筆記試験も通過。とうとう面接でもOK。

「あれから幾年――」などと四人はくされ縁を語る。

夏緒の気性は明暗くっきりしているだけに扱いやすい利点もあった。シラケ性分の秋緒もイジイジネチネチの冬緒もどこかしらそりが合う。ところが、おっとりお嬢さまの春緒と合わない。顔もスタイルも一番劣っているくせに最後に笑うのはいつも春緒。ぼんやりしているわりにはツキをつかむのがうまい。夏緒はそれが気に食わなかった。こっちは汗だくで努力しているのに、そばでのほほんとながめてヒョイと手を出し、簡単に手に入れてしまう。たとえばボーイフレンド。目をつけて話すきっかけを探して半年も待っていたら、たまたま一緒に歩いていた春緒が道を尋ねて、それが縁でガールフレンドにおさまった。それだけならいい。あとが悪い。

「夏ちゃん、彼のことどう思う。私はもういや、別れるわ」

人の気持を知っていて！　――と、これが短大一年の時のことだった。春緒は意地が悪いというのが夏緒の見方だった。

「おっとりムジナ」
「カンシャク玉ネギ」
お互いになじり合って今日に至る。カンシャク玉ネギとはいみじくも言った。まっ赤になって怒ったあとは涙になるのだから。二十九歳になっても変わらない。

夏緒にはひとつの気がかりがあった。四十五歳のやもめ課長がこの頃気になる。三年前に病気で奥さんを亡くし、そろそろ後妻をと、まわりが噂をはじめたから。パッとしない、課長止まりの、おもしろくもない男。それがヒョイと食事に誘われてあわてふためいた。たまたまその日は用事があったので断った。たいしたことない用事だからすっぽかしてもよかったけれど、待ってましたとウキウキのっていくのは自分自身に赦せなかった。そしてもう一度誘ってくれたらしっかり事態を考えてみよう、などと真剣に思いつめて。ところが彼は「そうか」と言って秋緒を誘ったのだ。秋緒も渋った。なぜなら二人でスーツを見に行く日だったから。多分秋緒も私と同じことを悩みながら断ったのだろうと、やや友人に満足した。そして振られ課長は次に春緒に声をかけた。春緒は「ええ、いいですよ」と誘いにのった。これがそもそも事の始まりだったのだ。
課長はそれっきり夏緒に言葉をかけてこない。噂では縁談を辞退したそうな。そして春緒はちゃっかり二度、三度と誘われているではないか。これが気にならなくてどうする。あの時に応

じていれば事は変わっていたと思うと口惜しい。代わって春緒がしゃらしゃら出かけているのが二重三重の腹立たしさだった。逃がしたと思ったらことさら課長がいい男に見える。取り戻せないかしら。なんであの日に秋緒と約束なんかしたんだろう。お昼休みに屋上で風に吹かれて考えた。肩をポン。

「なんだ冬ちゃんか」

アイスクリームを二個。冬緒は人が悩んでいると決まって優しくなる。

「昨日は同じかっこうで秋ちゃんがぼんやりしてた」

「アイスクリームあげたのね」

「そうよ。私たちは昔から悲しみは半分ずつって決めたじゃないの」

「幸せは一人占めだけどね」

ひじをつつき合って笑った。涼しい風。バレーボールに興じる若い声。ビルの山脈の谷間を流れる緑の川。のどかな夏の午後。

「秋ちゃん何か言ってた？」

「別に。あの人は言わないわよ、何があったって、あら、そう、で終り。今度のことも悪い気分みたいだけど、どうぞどうぞって感じよ。ヤセ我慢しちゃって」

「私は言いたいわ。春ちゃん狡いわよ。ずっと昔もこんなふうに恋を横取りされたんだから」

「恋？」

いや、そんなわけでもないけど。春緒が恋人然としているなら立派に恋の横領が成立する。

「彼女のやり方ってどっか企みくさいのよねえ。問題は笹原課長が夏ちゃんと秋ちゃんを誘ったと知ってから、自分から誘ったりして仲良く、それこそ恋人気どりよ。ま、春ちゃんて人は他人のものを奪うことに生きがい感じるのだからしようがないけどね」
「よくわかるね私たちの気持。冬ちゃんはタッチしてないのに」
「それはないわよ。気まぐれ男は三番目に私を誘ったかもしれない。きっと断ったと思うけど。同じよ私たち」
なんだ。冬ちゃんは誘われなかったのがおもしろくなくて春ちゃんを恨んでいる。まったく人を憎むきっかけなんて山ほどあるもんだ。
「奪っちゃいなさいよ、応援するから」
「そんなこと」
「欲しくて奪るんじゃないのよ。春ちゃんにも奪られる口惜しさを教えてあげるために」
そうか。そうだな。それなら正当防衛が成り立つ。
「だけど――」
「ん？」
「奪い去るほどの価値がある恋人かどうか」
「それもそうね」
「慎重に考えて決める」
冬緒は大きく頷いて最後の一口を入れた。きれいな夏の空。昔は私たちも空のように明るくて

きれいだった。吐息をつけば始業のベルが笑う。

単調な仕事に疲れて目をあげれば笹原課長。ひょっとしてあの人の奥さんになれたかもしれないのに。私は他の三人とちがって独身主義ではない。だから私を初めに食事に誘ったのだ。それなのに独身で通すと言っていた春緒がちゃっかりと。このままでいいのかしら、指をくわえて幸せを見送る法はない。二十九歳の今日にやっと巡ったチャンス。どうにかしなければ。でも課長も課長ではないか。あ、そうかい、と次に切りかえてそれっきり。

夏緒は悶々として、ある日曜日に課長の自宅付近へ出かけた。角でばったり会うとか、娘さんや姑さんを見ることができるかもしれない。何でもいいからきっかけがほしい。

道を尋ねて歩けば「笹原？　さあて」と言う人ばかり。まずまずの資産家と聞いていたのに。こりゃ春緒にすっぱり譲った方がいいかしら。三人目で「ああ、玉屋さんのことでしょう？　それならわかりますよ、椿泣かせの玉屋さんね、あっち」

垣根を回らせた旧家だった。これならやっぱり春緒に任せられない。親切に教えてくれた老婆は「椿の神さま」とぶつぶつ口の中で言って合掌した。

「椿泣かせの玉屋さんてどういうことですの」

一瞥。すごい目つき。

「あんたは玉屋さんと親戚かい」

「いいえ」

「それなら教えてやるよ。昔々この家はたいそうな商人だったそうな。ところが旦那さんがえら

いケチで庭の草木に肥料も水もやらなんだ。それで日照りが続いた年にほとんどの木が死んでしまった。椿が一本残ったのにあいかわらず水も肥料もやらん。椿はとうとう夜になると泣き出すという噂になってな。代が替わってもケチは変わらん。金の倉を立てても椿に愛情をやらん。今にたたりがあると言い伝えられてきたんだ」

「今も泣くのですか」

「さあ。とにかくそういう伝説がある」

夏緒は笑った。老婆は気を悪くして歩き去った。伝説か。神仏に興味をもつ秋緒ならよろこびそうな話だ。科学万能を信じる現代人としては笑って忘れる程度のものだった。夏緒は広い庭にだけ心をとめて帰ってきた。

学生時代から馴染(なじみ)の赤ちょうちん。

のれんをくぐれば焼き魚の煙、威勢のいいおじさんの声。「いらっしゃい、四つ子ちゃん」とか「いらっしゃい、イカ四つですね」とか挨拶は変わるけど。いつ来てもイカから食べ始める。席も決まっている。飲む酒の量も決まっている。「嫁に行かないというのも決まってますねえ」と言われる。「へらず口も決まっているわよ」とやりかえす。

今夜も黙っていてもスッと焼きイカが出てきた。盃をグビッとやってイカをつつきはじめるとおもむろに「さて、今日は何にしますか。貝としいたけがいいの入ってますけど」とくる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.